

御状本望之

至候、殊新茶

九種御越被入

御念候段、別而

忝存候、何も

致吟味勝申候

先日よりも猶以

能覚申候、今

度初而御越候

花之津三日

之津能御座候

別而花之津

能候つるかど存候

是も我等壺へ

可有御入候、七之

茶もよく御座候、

今少御ねり候て

我等つほへも

御入有へく候、

四之茶ハすくれ

不申候、其外者一

たんよく御座候

菅織部正
五月十日 定芳(花押)
藤村三人老返報

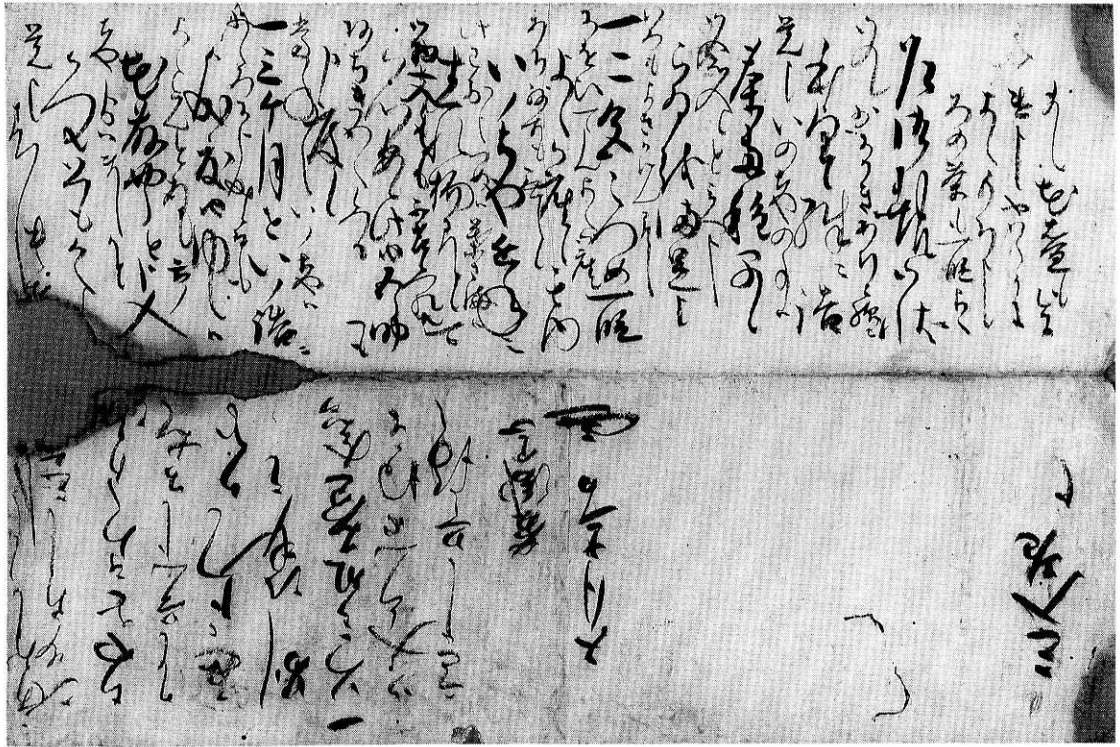
尚々ちや色々
被入御念送給
忝存候、いつれも
当年之茶
去年ニもまし
申候間可御心安候、
上林つめの茶
味トつめより
白候て味もよく
御座候、貴殿之
つめ之茶被入御
念可給候、匂ひ
ふかきやうに
可被成候、袋数
之儀、此方之注文
のこたく御候入て
給へく候、書付いたし
なをく遣候、
以上

(58)

と思われる。「白」に対して、引き合ひに出される逆の状態を彼らは「青」という。この白と青の対比でもって思い当たるのは、白にかかって、抹茶に挽き上がる瞬間の独特の光景である。まるで薄い鱗のように、上石と下石の隙間からすべるように出る上質の抹茶は、発色がとても鮮やかである。それに対して、粗くこなれてしまうと、ぱらぱらと石の間からこぼれ落ち、色もやや暗い印象が勝ってしまう。白と青の相違は、このあたりをさすものと考えている。事実、うまく挽き上がった茶の方が、もちろんうまい。ただ、問題はやはり、この季節、新茶でもって、そうした峻別がどの程度できるものか、なんとなく想像できる感覚・印象とズレがあるが、これに関しては実際にいろいろと試してみるほかないのかもしれない。

次の書状も難解である。発信者は後にこれが第三者の目にはいることなど想像もしていないだろうが、読もうとする気持ちこそぐ字面である。

同じく新茶の季節、「い」「ろ」二種類の詰茶の出来がすこぶるいいとする。とくに「い」は近年のすぐれものを持ち上げる。つづく一ツ書きの「三日月」「い」「花」「藤四郎」というのは壺、ただその中身との関係がよくわからない。ともかくも「右之通」にせよという。次の一ツ書きの「いっつミ殿」は、松平和泉守乗寿(一六〇〇〜五四)と思われる。お互いの配偶者が近い関係にあるためと、乗寿は將軍家光のおぼえがよく、定芳もそのあたりに一目置いて、茶について世話をやいたのではなからうか。



午御報御状

本望候、殊ニ詰

茶両種早々

被為越満足申候

一二色之つめ一段

よく御座候、其内

いノちゃ近年之

すくれ物にて候、可

御心安候、此由五郎助へも

申渡候、

一三ヶ月をいノ詰ニ

被成度由、内へハ

花藤四郎を被入

候へ者、いつもかくし

次第にて候、三ヶ「」

ちやをきつく申候

かと覚申候間、右之

通ニ被入候、つほ

別次第二候

一いつミ殿壺念ヲ

御入候はん由、得其

意申候、恐々謹言

五月十二日 菅織部正 (花押)

尚々花壺も今日

遣申候、やハらかに

よくもち申候

ろの茶も一段よく

御入候、少にかきあち之様ニ

覚申候、いのちゃの事ハ

御念入候とミへ申候

いろもよきかけんにて候

にをひ一たんよく御座候

あちも残所も無之候

此已前之つめハ葉さまハ

御物一入候ても不苦候つれ共

あちきつく候つる

当年之いノ茶ハ

ふくろに被成候ても

よく候はん存申候、旁ノ

ちやよりハましかと

覚申候、さてく貴殿「」

忝存候く かしく

